

# 海外養殖魚研究会

発行：海外養殖魚研究会

〒171 東京都豊島区池袋

3-13-13 前田ビル205号

(株)国際水産技術開発内

TEL 03-982-7139

No. 15 Feb. 1981.

第15回の海外養殖魚研究会で 会報 No. 14 の“マレーシアにおけるエビ漁業とエビ養殖の可能性について”と同時に発表された“バングラデシュの水産増養殖”(加藤, 佐内味)がまとまりましたのでお届けいたします。

## 1. 国の概要

人口は約8,000万人でほとんどが農村に居住する。首都ダッカは約300万人と地方都市(大きくて20万人程度)。国土は北海道の2倍弱に相当する約144,000 km<sup>2</sup>でその5(?)は常時水域部となっている。バングラデシュは東部の一部がビルマに接するが東, 北, 西部をインドに囲まれ, 南部はベンガル湾に面している。この国はガンジス川とその支流川が交錯するデルタ域に位置し, したがって東部のチッタゴン丘陵とアッサム地域から伸びた北部の丘陵を除き, 全て平野をなし, しかもそのほとんどが海抜10m以下にある。このため, モンスーン雨期には国全体の3~4割が水没し, 陸路より水路が発達し, また13, 11, 7の池沼が大小とりまぜ多く散在している。

## 2. 不漁期と栄養失調

BeelやBaor(三日月湖に近い)等の池沼は乾期に減水すると良い漁場となり, 一方稲田は雨期に魚がよく取れるようになる。しかし広い陸水域があるにもかかわらず, モンスーン雨期の増水時, 特に3~5月と7~9月には漁獲がほとんどなくなる。(なお, 6月は産卵のためニシン科のHilsaが大挙川を上るため漁獲が増える。)また, 魚獲量の2割を占める海域も雨期には荒れるので, 小舟なので全く出漁できない状態が続く。

ところで, FAOとユニセフおよび現地の大学が共同で農村の児童(5~14才)

15,000名を対象にして栄養状態を調べている。これから4~5月と9~11月に栄養失調が著しくなり不漁期と一致する事実が判明した。また、不漁期には栄養失調のため病気や失明がおこりやあつたり、特に子供や妊婦に大きい影響をもたらしていた。この栄養失調は魚類により動物タンパク質を供給することによりかなり改善できるものがあり、この不漁期に出荷できる養殖魚を飛屋させることか痛感させられる。

実際、ケッタゴン丘陵にある人造ダム湖では漁業公社により増養殖が行なわれ、ここには不漁期に出荷量が増える。しかし、陸路、水路とも悪く、流通がスムーズでなく、また国全体をまかほうには生産量が微々たる状態にある。

### 3. 池の利用状況

雨期に水位が2~5mも上昇するので、村落は高台に位置し、またその周辺に主に貯水用の池がつけられていく。このような池の利用状況について Boyra村落で調べた事例を示す。他の村落も似たような状態が多数あると思われる。この村落では計116池(計7.42ha)あり、規模別内訳は次のとおりである。

0.04ha以下	— 33%
0.04~0.4ha	— 55%
0.4ha以上	— 5%

そして全池のうち80%は周年水が存在し、また16%が100年前と古くからつくられていたにもかかわらず、養魚として利用しているのは全池の5%だけであった。養魚として池を利用しない原因として下記のことあげられた。

- ・農民が養魚を好まず、技術的にも無知であった。
- ・養魚池にある池の改修資金がない。
- ・池が共同所有なので利害が生じやすく、個別に行動しにくい。
- ・組合をつくるのに消極的である。

この他にいろいろ原因があるだろうが、池をより有効に活用できる余地がある。

### 4. 政府の増養殖への取り組み

水産は農畜産漁業省が扱っており、政府直属の池が89池あり。このうち25ヶPT

選んで UNDP が資金援助し、さらにこのうち 5ヶ所を近代的な種苗生産施設にした。対象魚種は下記に示すが、いずれも現地で値段が高く庶民がほとんど口にはできないものである。将来はそこから種苗を各地の養成地へ配布する予定だが、技術的に幼稚で歩止りが悪く、あまり成果をあげていないのが現状である。

◦ インディアンメジャーカープ

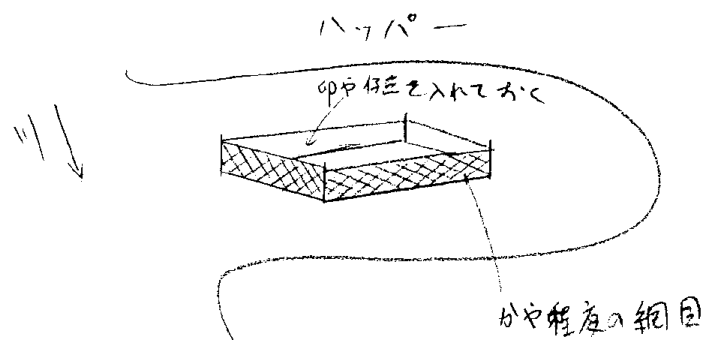
*Catla Catla*, *Labeo rohita*,

*Cirrhina mrigala*, *Cirrhina calbus*

◦ *Tilapia nilotica*

◦ *Ciprinus carpio*

その他にフッタゴン、ジエソール等にインディアンメジャーカープの天然産卵場があり、稚魚業者が集まっている。たとえばジエソールでは約 1.5~1.6 億尾/年の稚魚を生産している。この天然種苗は減少する傾向がみられ、また、将来養魚を発展させるためにも人工的な種苗生産技術が必要とされている。ヤンドゴールの国立研究所でホルモンインジエクションが一度成功したが、その後の成果は小さいようである。たとえば、ハッパー内で卵や仔魚を生育させる技術を見ても、静水域にハッパーを置くのが酸素不足とまぬき歩止りが悪い状態にある。



日本でもそうだが、国公立の研究、試験機関と民間の技術が充分にからみ合っていない面が大きい。